

学問

人は社会から必要とされていると実感している限り老けないし、社会的役割を担っていると思う時に生き甲斐を感じるものである。それは、他者（公）のために自律的に生きている証である。自律的に生きる精神を衰弱させないためにも、また事を為すためにも学問は必要である。

ところで、昔は心の学問を専一としたが、今日では、学問とは物質的に豊かになるための知識を得ることと思っている者が多い。尊卑の価値観が失われ、貧富の価値観のみが横行するようになったため、人間の品性は顧みられることがなくなった。浅薄な虚栄心のために修学法を誤ると、一身を誤るのみならず国家社会の衰退をも招くこととなる。

そもそも、知識とは理解力や記憶力といった悟性の働きに伴うもので、万人に共通した頭脳の機械的作用である。人によって知識の多寡や理解力の差はあるものの、人に注ぎ込まれた知識だけでは何の役にも立たない。

何故ならば、転変する社会に生きる者にとっての必須事項は、自ら問いを作り、自ら答案を書く能力だからである。知識の多い者は、学んだ事態の答案はよく書くことが出来るが、新しい事態の問いに対する答案は書けない。新しい事態の答案を教えられていないからである。この知識を学問と言うならば、それは<死んだ学問>である。

これに対して、体験の中から^{にじ}滲み出てくる直感的な人格的学問、即ち「知恵」こそが、常に変化している社会において必要とされる。昔から「知識は身につけるもの、知恵は出すもの」と言われているが、知恵とは生活的であり、精神的であり、人格的であり、これこそが<生きた学問>である。それは、流した汗の中から生まれ、社会の波に揉まれて豊かになる。また、世の中は知識の通りに動くものではなく、そこに矛盾を感じる。その矛盾を何とかしようとして人の活動が生まれる。知恵とは人の活動を促す源でもある。

このような知恵から生まれるのが見識である。見識とは人生の体験を積んで得た価値判断力のことで、これによって人生の中にある深い理法（道）が理解でき、将来を見通す力（先見性）を持つことができる。理外の理—より高度な理、目に見えない高い摂理—を^{つか}掴むことも出来る。

この見識が備われれば善悪を弁別でき、現実生活に生じる弊害や副作用を片付けることが出来る。また、全体がどうあるべきかを考えることができ、「社会の中の会社」という視点を忘れることなく「会社の使命」を貫くことができ、さらに公私の別を弁えたリーダーとなれる。

ところが、今日の学者と称される人の中には、名誉や金銭のために知識を売っている者が多い。この様な人を石田梅岩は「文字芸者」と^{さげす}蔑んだ。また、現今の教育は物質的豊かさのみを求める内容となっており、徳育を軽んじて知育を重んじる傾向がある。知識を偏重し過ぎると、生きた学問を軽視して是非善悪の識別を不能にし、また功利を主として道徳を遠ざける。松下幸之助の言うように、「学問もあり、理論的にものを見る人ほど、ともすればそれにとらわれて理外の理を軽視しがち」（『指導者の条件』 p 219）という弊害に陥

るのである。

　学問とは見識を養い磨くために行われるものでなければならず、したがって一生をかけて続けていかねばならない行為なのである。